

7. 岩座神地区文書の調査概要と内容

長谷川 巴南

1. 岩座神地区文書調査の経緯と方法

岩座神地区文書は、兵庫県多可郡多可町加美区岩座神に所在する岩座神公民館において、歴代の区長により保存されている文書である。聞き取りによると、以前は文書の入った長持を区長の自宅にて保管し、区長交代のたびに移動させていたという。現在は移動が大変であるために、岩座神公民館に保管されている。2022年度文化遺産フィールド実習では、区長・木原均氏の許可を得て岩座神地区文書の調査・整理を行った(図1)。

2022年8月9日、岩座神公民館において文書の概要を、近世から平成時代の文書を中心に確認した上で、箱・文書の撮影、手書き目録を作成した(図2)。この際、調査時間の制約のため、番号付与は近世から明治時代の文書に限定しており、大正・昭和以降の文書の記録は多可町教育委員会が実施した。また、近代文書の冊子類は一部の内容のみ撮影した。



図1 岩座神地区文書調査風景

番号	表題	年月日	作成	受取	形状・員数	備考
30	去々来々村中衆冊 入用書上帳	申8月 明治5年	播磨多可部 岩座神村	 	縦帳 1	表紙に朱字で 「下帳」
31	新道藩請寄進帳	明治3 年10月	世治人 □上村 〇〇〇 中村村 〇〇〇 中村村 〇〇〇 中村村 〇〇〇 計4人	岩座神村・ 御役人中様 御村中様	縦帳 1	
32	去子年正月の12月 村中小入用帳	元治2年 丑3月	播州多可部 岩座神村	新藤六蔵様	縦帳 1	総紐上に黒判印

文化遺産学フィールド実習

日付(

8/9)

文書名(

岩座神地区文書)

名前(

守田 侑)

京都府立大学

図2 手書き目録

調査参加者は、諫早直人、井上直樹、上杉和央、岸泰子、東昇、菱田哲郎（以上、教員）、長谷川巴南、守田悠（以上、本学博士前期課程1回生（調査当時、以下同））、石川達葵、岡崎壮太、小原万侑、小島慧音、島村朱音、橋本唯、廣野勝、藤田尚希、本田龍平、依田萌奈、山下悠衣奏（以上、本学学部2回生）である。

未撮影の文書が残っていたため、10日に岩座神公民館において、翌11日に文書を多可町中区に所在する那珂ふれあい館に移して、東昇と長谷川巴南が追加撮影を行い、番号を付与した227点の撮影を完了した。なお、当日未調査となった近代史料、箱1の174点、箱2の62点は、多可町教育委員会（早崎喜代美、森野あゆみ、安平勝利）で目録化された。その後、文書は岩座神公民館に返却されている。

続いて京都府立大学文化情報学実習室において撮影した写真をもとに全点の目録をエクセルで作成した。調査日は2022年8月16日、10月14、21、28日、11月10日である。この目録作成には、滝澤和湖（博士前期課程2回生）、長谷川巴南（同1回生）、渡邊幸奈（学部3回生）、石川達葵、小原万侑、小島慧音、島村朱音、渡部凌空（学部2回生）が参加した。

2. 岩座神地区文書の内容

今回調査した岩座神地区文書は全464点であった。2つの箱から構成されており、それぞれ箱1、箱2とした。箱1は364点、木製長持で下部には素木の引出しがついている（図3、4）。引出しには印鑑、盃、軸物などが保管されていたが、今回の調査には含んでいない。また、長持の中に小箱が1つ入っており（図5、6）、小箱の蓋裏には「公事訴訟」等の墨書があるが判読困難である。

箱2は100点、木箱で蓋に「昭和六年四月吉祥/幣拝殿改築関係書類箱/五霊神社」と墨書があり（図7～9）、五霊神社の改築に関する諸入用割帳や金銭出納帳も含まれる。近代史料がほとんどであるが、数点の近世史料や明治維新期の寺社制度関係史料も残る（後述）。

年代が明記されている文書の年代分布が図10である。17世紀の文書は2点、寛文6年（1666）と延宝5年（1677）の2点の検地帳である。延宝検地は主に畿内の幕府領にて実施され、検地帳はその後の年貢徴収のための基本台帳となった。延宝検地帳に関して、小原万侑「岩座神村の延宝検地



図3 箱1

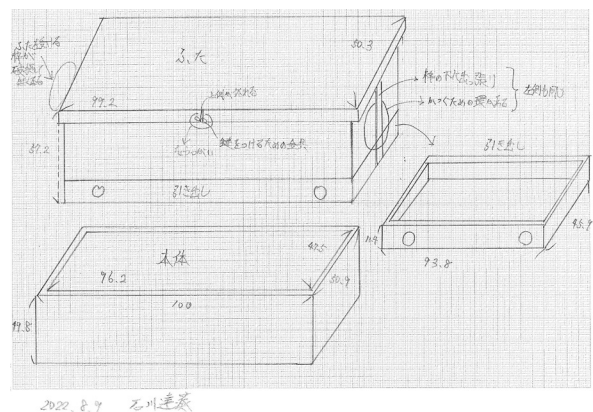


図4 箱1現状記録



図5 箱1中の小箱



図6 小箱の蓋裏

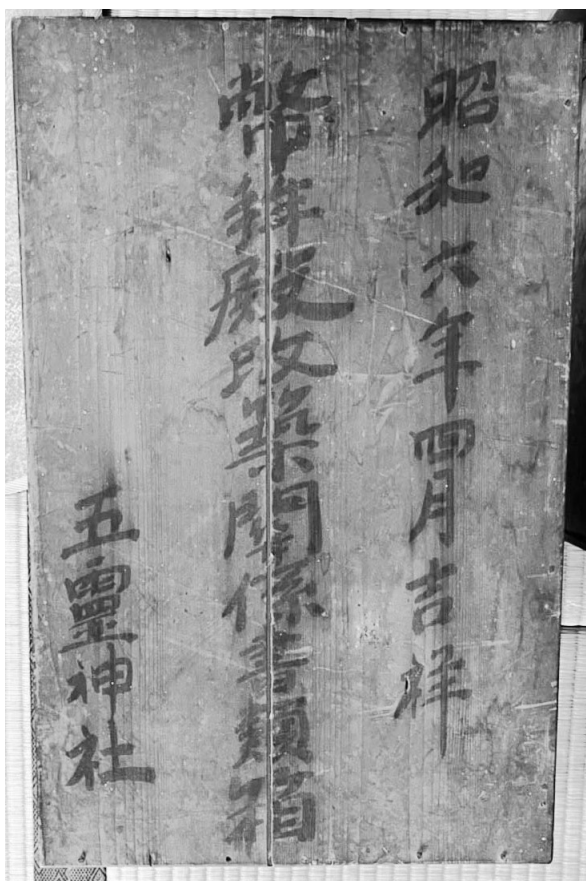


図7 箱2蓋の墨書



図8 箱2本体

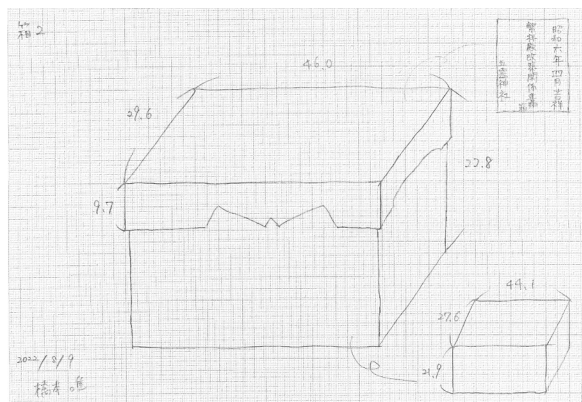


図9 箱2現状記録

帳」に詳しい。

18世紀の文書は6点、寛延2年（1749）の検地帳や「田方立地内見合附帳」など土地に関連するものや、夫食割帳・免状など種類は様々であるが村民の生活・農業に関連した文書である。また、天明元年（1781）をはじめ19世紀にかけての名寄帳が5点あり、うち1点はその中で「太助」なる人物の部分を抽出したもので、個人的な保存を目的にした帳面だと考えられる。また、年代不明の名

寄帳も1点ある。

図10が示す通り、岩座神地区文書は1850年代から増加し、昭和・平成期まで継承している。特に明治5年(1872)18点、同6年16点、昭和5年(1930)17点、同6年14点、同7年12点が残し、他と比較して多い。まず、明治5、6年は、幕末維新期から明治新政府の体制が整備される画期であり、岩座神村域も慶応4年(1868)に幕府領から「兵庫県」へ、そして明治4年11月「飾磨県」、明治9年8月再び「兵庫県」へと再編されており、その様子が岩座神村文書の宛名などからも伺える。この期間には、村の経済的状況や人口などを調査した取調帳面類が多い。箱2の明治初期の文書にも「神社取調書上帳」「山林原野取調帳」などが含まれる。

つぎに、昭和5～7年は、箱2蓋墨書にある昭和6年の改築に関する、昭和5年「神光寺火事後金銭出納帳」、「多可郡松井庄村社五霊神社拝殿幣殿改築工事設計書」(昭和6年推定)である。この他箱2には五霊神社と神光寺に関連する史料が集中する。修理関連として、嘉永6年(1853)「仁王門修復所入用控帳」や「仁王門修復御寄付帳」がある。近世の神光寺に関しては、渡部凌空「近世岩座神村神光寺の仁王門修復と信仰圏」を参照いただきたい。

そのほか近世文書では、天保6年(1835)、同9年の「宗門人別御改寺請并人別帳」などがある。宗門人別帳は、近世寺請制度の基本となる帳面で村の戸籍の役割を果たした。箱1にも安政7年(1860)から慶応4年の宗門人別帳が5点残り、慶応4年の宗門人別帳の内容は小島慧音「近世後期岩座神村の家族・婚姻・相続」に詳しい。また、五霊神社と神光寺の関係を示す史料もみえ、弘化4年(1847)の「神光寺金銀山銀入用覚帳」、「神光寺村内金銀受取帳」や、明治3年「神光寺算用改帳」など数点がある。

岩座神地区文書は、帳面類・冊子類が多い。近世の岩座神村では、検地帳や名寄帳は17、18世紀の古い文書が現存するが、多くは幕末期である。この時期に庄屋が交代しており、そのことが文書管理に影響した可能性もある。また、明治以降、大区小区制により第五小区、第四大区第三小区となり、明治8年多神村に合併し、同22年松井庄村となる。そのなかで岩座神組、岩座神区と変遷し現在に至る。近代になると土地や戸籍をはじめ、組や区の文書が多数現存する。このような文書を区有文書などと呼ぶが箱1に多い。箱2は墨書から、神光寺・五霊神社関連文書として箱1とは別置されていたと考えられる。

謝辞

調査全般にわたって、多可町教育委員会 安平勝利氏にご協力いただいた。ここに記して感謝を述べたい。

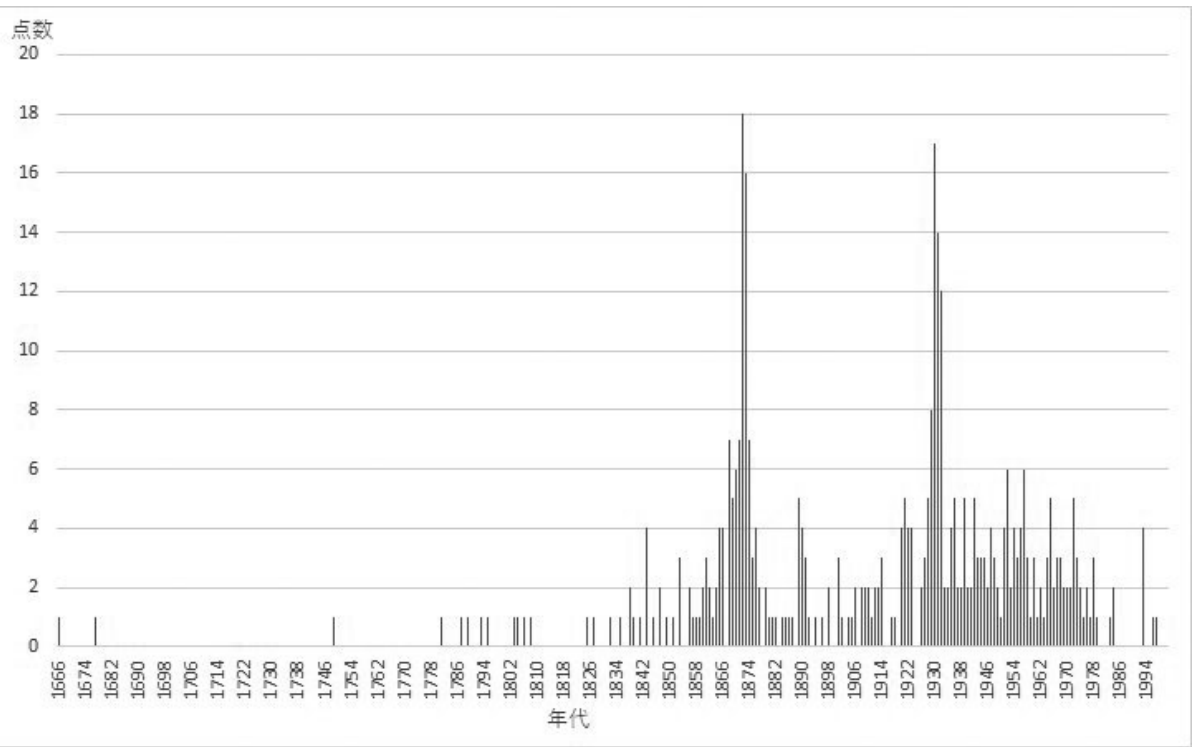


図 10 岩座神地区文書の年代分布